

昔のアイヌの人々は自然界のあらゆるものをカムイ（神）だと考えていました。山や川はカムイ、動物や鳥もカムイです。それからカムイの魂は全て人間の姿をしています。動物たちの魂も人間の姿をしていて、ふだんは山奥や天にあるカムイモシリ（神の国）で人間と同じような暮らしをしています。

動物たちはときどき毛皮や肉を身につけて人間の家に遊びにやってきました。毛皮や肉は外出するための服のようなもの。人間は動物たちを矢で射て殺しますが、それは魂をお客として迎え入れ、服を脱がせるようなものだ、と考えられていました。

人間たちは動物の魂をお酒やごちそうでもてなし、すてきなイナウをあげます。毛皮や肉は動物から人間へのおみやげ、もてなししてもらったことへのお礼なのです。動物は死んでしまいますが、魂はなくなりません。山奥や天にあるカムイモシリに帰ります。そこで新しい肉体を身につけ、またごちそうしてもらおうと人間の家に戻ってくるのです。

この本には、さまざまなかむイが登場しますので、解説してみましよう。

まだら鳥 「まだら鳥」はとてもえらいカムイです。少年は鳥を矢で射ますが、それは鳥から見れば、招待されて家に招かれたということ、とアイヌの人々は考えます。

少年はたくさんのイナウを贈ります。イナウとはヤナギなどの木の棒を削って作る飾りで、カムイにとっては、とてもすてきな宝物になります。美しいイナウを立てると、イナウの魂

はカムイの国に飛んで行き、金や銀のイナウになると思われています。イナウを削るのは男性の役目であり、女性は手をふれてもいけない、といわれています。

まだら鳥（の魂）はイナウ（の魂）を神の国に持ち帰り、カムイたちに「おすそわけ」すること、尊敬され、カムイの世界でえらくなることができました。

炬ぶちのカムイ 「炬ぶち」は、なぜかあまりよくないカムイだと考えられていました。別のお話に「炬ぶちの魚」という名前の魚が登場しますが、それもやはり悪いカムイです。

サクラマス、イトウ、サケ 魚たちは、それ自体がカムイだと考えられることは、あまりなかったようです。でも、魂と肉体があるという点では同じです。カムイと同じようにていねいに扱わないと、魚たちを送りだしてくれるカムイが怒ってしまいます。網にかかったり、釣った魚を殺すときには、きれいに作った「たたき棒」で頭をたたいて殺さなくてはなりません。たたき棒はイナウと同じように魚への贈り物だと考えられていて、イナウと同じように木を削ってきれいな飾りをつけます。

カムイたち カムイたちは、もともと天にあるカムイモシリに暮らしていました。この世界であるアイヌモシリができてから、地上に降りてくるようになったのです。まだら鳥は神の世界と地上を行ったり来たりします。炬ぶちは、ずっと地上にいます。でも、地上に下りないでずっと天にいるカムイたちもいます。なまけ者の少年を罰して月に閉じこめたのは、そんないつも天にいるカムイたちなのでしょう。

その人の守り神のカムイ 人間には生まれたときから、一人一人に「その人の守り神のカムイ」がいます。人によってカムイは一人だけかもしれないし、たくさんいるかもしれません。弱いかもしれないし、強いかもしれません。生まれつきいる守り神のカムイとは別に、なに

かのきつかけで、どこかのカムイが、後から守り神になってくれることもあります。

小鍋 動物や鳥はカムイですし、魚をくれるカムイもいます。山や川もカムイです。それだけでなく、身の回りの道具も、みなカムイです。このお話に出てくる小鍋ももちろんカムイです。あまり強いカムイではありませんが、大切に扱ってれば、このお話のように持ち主を救ってくれることもあるのです。

化物のような女のカムイ カムイにもいろいろいます。良いカムイもいれば、悪いカムイもいます。男のカムイもいれば、女のカムイもいます。隙があれば悪いカムイが入ってきます。ゴミの山の下は、その人々の守り神のカムイの目も届かないので、そこに入りこんだ悪い女のカムイが村長の息子の魂を捕まえてしまったのです。

水のカムイの一人娘 水のカムイは人間を守ってくれるカムイです。カムイも人間と同じように暮らしていますから、家族がいます。このお話では娘さんがいて、クンネナイの少女を守っていました。生れたときからついていたわけでありませんが、少女が幼かったころに、守り神になってくれたのです。

カムイの子孫(村長の息子) ごくまれに、正体を隠して人間の姿になったカムイと人間が結婚することがあります。その子孫は人間ですがカムイの子孫でもあり、多くのカムイたちに守られています。

(文・丹菊逸治)

出典 物語を語ってくれた人

この本にのっている物語はみな、アイヌのおじいさん、おばあさんたちが、語ってきかせてくれたものです。それを元に、あたらしく、わかりやすく書き直しました。次の本に、話してくれた元のお話が、アイヌ語と日本語とで、のっています。

カムイを射止めた男の子―まだら鳥のカムイが語った物語

二谷国松さん(二八八八年〜一九六〇年) 平取(北海道)

久保寺逸彦編『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』(岩波書店、一九七七年) 所収 久保寺逸彦(採録)

「神謡55 斑文鳥の神の自叙」より

月に閉じこめられたなまけ者

杉村キナラブクさん(二八八八年〜一九七四年) 旭川(北海道)

『昭和62年度アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズI アイヌ民話』(北海道教育委員会、一九八八年)

所収 藤村久和(訳註)「10 我が子を月に召される母親の物語」より

小鍋の教えでしあわせになった娘さん

黒川トヨさん(二九一四年〜一九八三年) 平取(北海道)

『平成11年 アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ13 トウイタク(昔語り)3』(北海道教育委員会、

二〇〇〇年) 所収 藤村久和(訳註)「3 欠けた小鍋の教えで立身した少女の話」より

公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

アイヌ民話撰集企画編集委員会 企画委員

丹菊逸治（委員長、北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授）

押野里架（委員）

高橋靖以（委員、北海道大学アイヌ・先住民研究センター研究員）

田村将人（委員、札幌大学専門員・特命准教授）

矢崎春菜（委員、一般財団法人アイヌ民族博物館学芸課）

吉成香織（委員、公益財団法人北海道文学館学芸員）

イソイタク 2

アイヌの昔話 カムイを射止めた男の子

発行日 平成27（2015）年3月16日

企画・監修 アイヌ民話撰集企画編集委員会

語り 二谷国松・杉村キナラブック・黒川トヨ

文・編集 寮美千子

絵 鈴木隆一

装丁 松永洋介

発行 公益財団法人 アイヌ文化振興・研究推進機構

〒060-0001 札幌市中央区北1条西7丁目プレスト1・7

TEL 011-271-4171 FAX 011-271-4181

URL <http://www.frpac.or.jp/> E-mail ainu@frpac.or.jp

印刷 株式会社 北海道機関紙印刷所